

糸満市の歴史と民俗を歩く

旧摩文仁村

集落ガイドマップ



旧摩文仁村域各字の位置図

糸満市と旧摩文仁村の位置図



【もくじ】

旧摩文仁村のあらまし

旧摩文仁村について P2

旧摩文仁村の沿革 P2

旧摩文仁村の主な年中行事 P2

旧摩文仁村各字の主な年中行事一覧 P3

集落ガイドと1945年ごろの屋号地図

南波平 P4 伊 原 P5

米 須 P7 大 度 P10

摩文仁 P12

一緒に歩こう

記念碑・土木遺産 P13

旧摩文仁村域の現況図 P14

日本最南端の縄文遺跡 P16

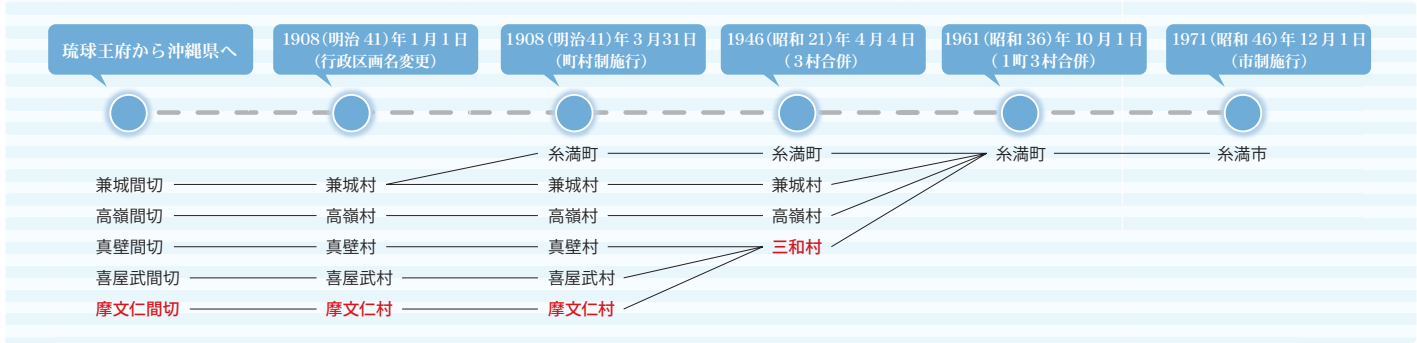
旧摩文仁村のあらまし

旧摩文仁村について

糸満市域の南東部で字南波平、字伊原（伊礼、石原）、字米須、字大度、字摩文仁の5か字にあたる。このうち字米須から字大度の大度園地にかけての海岸線には穏やかな砂浜が広がり、さらに東の字摩文仁には険しくも美しい海食崖の風景が続く。沖縄戦では各地から人々が追い詰められ、多くの犠牲者を出した地域でもあり、旧摩文仁村全域が沖縄戦跡国定公園に含まれている。

旧摩文仁村の沿革

琉球王府時代、糸満市域は1つの行政区ではなく、摩文仁間切のほか兼城間切・高嶺間切・真壁間切・喜屋武間切の5つの間切に分かれていた。1879（明治12）年の沖縄県設置後もこの体制が引き継がれ、1908（明治41）年に間切が村に変更されたことで摩文仁間切から摩文仁村となる。摩文仁村はその後40年ほど存続したが、沖縄戦による被害で人口が減少し、行政運営が難しくなったことから、近隣の真壁村・喜屋武村と合併して三和村の一部となった。その後、三和村はさらに糸満町・兼城村・高嶺村と合併して糸満町になり、市政施行後は糸満市となった。旧摩文仁村の字のうち、字伊原はもともと伊礼村と石原村であったものが1903（明治36）年に合併し、両村の一文字ずつをとって伊原村とされ、1908（明治41）年の行政区画名変更以降は字伊原となった。



旧摩文仁村の主な年中行事

旧摩文仁村は純農村地帯で、3つの字が大きく海に面しているものの漁業は根付いておらず、農耕儀礼が祭祀の中心である。ここでは各地域の主な年中行事の一覧表とともに旧摩文仁村の特色ある行事を紹介する。字伊原は合併後も伊礼と石原で別々に年中行事を行っているため、表中ではそれぞれに項目を立てている。なお、文中・表中の月日は旧暦である。

メーンカー（前の井泉）

新年にンプガー（産井泉）であるメーンカーをはじめ、ウドゥスーガー（小渡潮井泉）やオーマのビジュンなどを巡拝する字大度の行事。過去一年間に生まれた子どもの額にメーンカーの水を付けるミジナレー（水撫で）をして健康を願う。



ハチウガミとも呼ばれ、赤饅頭などを供えて拝む（字大度）

ウマチャー（御祭）

麦と米の出穂と収穫を祈願する祭祀。字摩文仁のウマチャーではすでにカミンチュ（神人）はいないが、あたかもその場にるように参加者全員が次々にカミンチュの座席にウケーマー（お粥）を注ぐ風習が見られる。門中祭祀として残る字もある。



旧家（永田）の当主がウケーマーを注ぐ（字摩文仁）

アブシバレー（畦払い）

畦の草刈りをして害虫を追い払い豊作を祈願する行事で、製糖作業の労をろうクシユックイ（腰憩い）と同日に行うことが多い。字伊原では当日の早朝、ウグワン（御願）の前にムラ清掃を行い、拝所やカー（井泉）をきれいにする。



集落の拝所やカー 11か所を巡拝する（字伊原）

ハマヌウグワン（浜の御願）

暑さが本格化する6月に字摩文仁で行われる雨乞いのための行事。参加者全員でチンガー（金井泉）下の小さな砂浜に下り、重箱料理のほか酒や線香などを供え、海に向かって拝む。水資源が乏しかった地域ならではのウグワンである。



かつては大勢のムラの人が集まり賑やかだったという（字摩文仁）

チナヒキ（綱引き）

綱引きは豊作を予祝する行事で、かつては多くの集落で行われていたが、現在は字米須が6月25日のカシキー（強飯）に引くほか、字南波平と字大度がジューグヤー（十五夜）に引いている。なかでも字米須は大綱で、煌びやかな衣装に身を包んだシタク（支度）も登場し、周辺の集落からも多くの見物人が集まる。



ンマンイーという馬場跡の広場で東西に分かれて引く（字米須）

ジューミヌゲー

戦前8月9日の夜に字米須で行われていた行事で、男子は9歳、女子は11歳の年に、それぞれサナギ（禪）、メーチャーという下着を着けさせることで大人の仲間入りをさせた。年上の青年男女が新人男女の下着を取ろうとし、新人は取らせまいとする、という攻防が何回も続いたという。メーチャーは硬く織り上げた黒や茶の幅の細い布で、着けると歩きにくいこともあったようである。

ククヌカー

8月9日に行う伊礼のムラウグワン（村御願）で、拝所に豆腐3丁や酒などを供えて拝む。戦前は池の石を持ち帰って屋敷の東側に置いた。午後は若者頭が牛の内臓を炊き、拝所に供えて拝んだ後にムラの人たちに振舞ったと伝わる。

シーサーモーラシー（獅子舞）

ジューグヤーを中心に、悪疫払いのため、また五穀豊穡を願ってシーシガナシ（獅子加那志）を舞わせる。字大度では年3回行われ、そのうちの盆は、獅子がいて先祖が家に来られないとって、家庭ではウンケーを早く済ませるといふ。字南波平は年2回のうち、8月11日は集落の東と西で舞わす。字米須ではジューグヤーにウシデークの踊り手を先導するように舞わせる。



上：かつての〈伊敷〉の庭で獅子を舞わせる若者頭(字大度/2001年)
下：近年毛直しなどの修復が行われ、より精悍な表情に（字南波平）

旧摩文仁村各字の主な年中行事一覧

月日(旧暦)	行事名	南波平	伊礼 伊礼	石原 石原	米須 米須	大度 大度	摩文仁 摩文仁
1月吉日 ^{※1}	メーンカー（前の井泉）					○	
2月15日	二月ウマチャー（麦穂祭）	○	○	○	○	○	※2
2月吉日	ハクドゥヌウグワン（白露の御願）						○
3月15日	三月ウマチャー（麦大祭）	○	○	○	○	○	※2
4月吉日	アブシバレー（畦払い）	○	○		○	○	※3
5月15日	五月ウマチャー（稲穂祭）	○	○	○	○	○	※2
6月吉日 ^{※4}	ハマヌウグワン（浜の御願）						○
6月15日	六月ウマチャー（稲大祭）	○	○	○	○	○	※2
6月25日	カシキージナ（強飯綱）				○		
7月13日	シチグワチ盆 獅子舞					○	
7月14日	ナカントウカ（仲十日）						○
7月15日	エイサー 獅子舞	▲			○	▲	▲
8月9日	アガリジョーウグワン シーシガナシの化粧直し ジンヌミー ククヌカー、ククヌカウイミ ジューミヌゲー				○		○
8月11日	獅子舞	○				○	
8月15日	ジューグヤー（十五夜） 綱引き 獅子舞 棒術 ウシデーク 角力	○	▲			○	▲ ^{※5}
9月5日	アガリスーパルヌウグワン（東潮原の御願）						○
9月9日	ティラウガミ（寺拝み）、ティラヌメー、クングウチムヌメー 菊酒	○		▲		○	○
12月8日	シマクサラシ、チーチキー					○	○
12月吉日 ^{※6}	ミジヌウグワン（水の御願）						○

○＝現在行われている ▲＝現在行われていない（2021年現在）
※ウマチャーなど行事によっては門中や家庭主体で行われているものも含む
※1 三が日後の最初の午か未の日 ※2 15日が庚・辛の日場合は順延する
※3 新暦5月中旬の山止から6月後半の山止解除の間の日曜日 ※4 中盤から後半の日曜日
※5 十五夜後の最初の日曜日 ※6 ムーチー後の壬か癸の日

ウシデーク（臼太鼓）

女性たちが太鼓の音に合わせて輪になって踊る祭祀儀礼で、ジューグヤーを中心に行われている。字米須のウシデークは糸満市指定無形民俗文化財になっており、東西に分かれて集落の拝所を巡拝しながら、最後にはひとつの輪になって華やかに舞う。字摩文仁でもかつては女性のための踊りであったが、近年は男性も含めウグワンの参加者全員が楽しんで踊っている。



平成元年にあつたえお揃いの衣裳で優雅に舞う（字米須）

シマクサラシ

集落の境界付近で左縄に牛などの骨を吊したり、血を木の枝に付けたものを屋敷の四隅に置いたりして悪疫祓いをする行事。旧摩文仁村では12月8日のムーチーの日に行われることもあり、現在では行事名をムーチーと呼ぶこともあるほか、字大度ではチーチキー（血付け）ともいう。



集落の入り口で悪疫が入らないように拝む（字米須）

いずれの字も近年はウグワンだけになっており、字米須は骨つきの豚肉を、字大度は牛生肉の塊を、字摩文仁は火を通した薄切りの牛肉を拝所などに供えて拝んでいる。また字米須ではかつて8月11日のチナマキ（縄巻）でも同様のウグワンを行っていた。

ミジヌウグワン（水の御願）

かつてはヒーヌウグワン（火の御願）と呼ばれていた字摩文仁の行事で、12月の夜半に突然公民館のボンベ鐘を打ち鳴らし、「ホーハイ、ホーハイ」の掛け声とともに鳴り物で大きな音を出しながら、集落の東西の外れまで練り歩いて拝む。火の用心のための行事だといひ、日程は役員などにしか知らされない。約800年続いていると伝わっている。



公民館の鐘に応じるように家々でも鳴り物を叩く（字摩文仁）

●集落ガイド（本文）について

- 各字見出しの人口と世帯数は2021（令和3）年12月31日現在のものである。
- 文中の月日は基本的に旧暦のものである。
- 家の屋号は1945（昭和20）年当時のもので、〈○○〉と表記した。

●屋号地図について

- 各字の「屋号地図」は『糸満市史 資料編7 戦時資料下巻』収録の「屋号地図」に若干の加除訂正を行ったものである。
- 各集落とも現状と対比しやすくするため、戦後の番地を付してある。
- 屋号を（ ）内に表示したものは1945（昭和20）年当時家族全員が死亡、または移民、出稼ぎなどで居住者のなかった家である。
- 本図の屋敷の形状や面積、道幅などは必ずしも正確なものではない。また各字の縮尺は統一していない。
- 1945（昭和20）年以降に移転したことが明らかな拝所などについては、「現在の○○」とし、現在地点も併記した。

●現況図について

- 2020（令和1）年の国土地理院地図に、「糸満市地籍図（大字・小字集成図）」から小字界、小字名などの情報を転記した。
- 遺跡、グスクなどについては「糸満市文化財分布図―埋蔵文化財―」を参照のうえ、地籍図などをともに概念的な範囲を記した。
- 市道については、主要な道路名についてのみ表示した。
- 門中墓については、現況図範囲内にある旧摩文仁村域5字の成員が使用する墓を中心に「○○腹」として位置を示し、それぞれの腹、門中名称の後ろに（ ）で字（字東里の場合は旧字）の略称を入れた。2つ以上の腹・門中で共有している場合はいずれも併記した。略称は以下の通り。
旧摩文仁村：字南波平→（南）、字伊原→（伊）、字米須→（米）、字大度→（大）、字摩文仁→（摩）／旧喜屋武村：字喜屋武→（喜）、字福地→（福）、字山城→（山）、東辺名→（東）、上里→（上）／旧真壁村：字真壁→（壁）、字新垣→（新）、字名城→（名）、字小波蔵→（小）。
- 旧土族系の家や一門の墓の場合は「○○家」、「○○一門」とし、それぞれの家の後ろに（ ）で字の略称を記した。
- 各字の公民館をはじめ、地域のランドマークになりうる施設などにはその名称を記した。
- 拝所、カーなどは、該当字の解説文の番号とともに名称を記した。

みなみ なみ ひら 南 波 平

方言名：ハンジャ
人 口：162人
世帯数：75戸

発祥地は波平グスクの南側だといわれ、その後2度の移動を経て、現在は古島を挟んだ北側に集落が広がる。もともとの行政名は波平であったが、旧兼城村の同名地と区別するため南波平と名称変更した。

1945年ごろの字南波平



❖ 拝所 ❖ 1 高上



2 ヌン殿内の神屋



古い時代のクニムトゥ（国元）だという旧家跡に残る神屋で、ムラウグワン（村御願）で最初に拝む。ヒヌカン（火の神）と5つの香炉があり、獅子も納められている。

4 トゥン（殿）

波平グスクにあり、『琉球国由来記（以下由来記）』の「波平城之殿」とされる。かつてウマチーを行った場所で、周辺にはグスクの神を祀るという拝所やアジパカと呼ぶ古墓がある。

5 ムトゥタカウィー（元高上）

波平グスク北麓は古島だとされている場所で、〈高上〉の元屋敷跡に祠がある。玉城のミーフダ（三穂田）から鳥がくわえてきた3本の稲穂をここに供えたという伝承が残る。

6 ウスクサ



7 ティラ



ティラウガミ（寺拝み）といって9月9日にムラウグワンで拝むほか、過去1年に結婚や出産、新築など祝い事があった家も報告と感謝の拝みを行う。近年建て替えた際に、〈川上小〉にあったホーイヤーという拝所を合祀した。

8 ジトゥービヌカン（地頭火の神）

ムラウグワンで拝むヒヌカンで、もともとは古島の一角にあったものを公民館の南の高台に移して、小さな祠で祀ってある。かつてのウマチーでは最後にここを拝んだという。

9 カニマン

古い時代の鍛冶屋跡とも、ヌルガー（ノロ井泉）とも伝わる。この拝所の北東にノロの兄弟が葬られているとの伝承がある。

10 前上原の元屋敷

〈前上原〉の屋敷跡に石積の拝所とカー跡があり、カママーイなどのムラウグワンで拝んでいるが、詳細は不明である。

❖ カー ❖

1 カミガー（神井泉）

カーオーとも呼び、ムラで最も古いカーとも、ヌルガーとも伝わる。

2 アガリンカー（東の井泉）



ムラのンブガー（産井泉）で、主に飲料水として使われ、字福地や字糸洲の人も汲みに来た。戦前はハンジャヒラマーチ（波平平松）と呼ばれる立派な松の木があった。

3 イリンカー（西の井泉）

洗濯や製糖作業などに使ったカー。湯灌の水はここで汲んだ。

い はら 伊 原

方言名：イリー イサラ
人 口：188人
世帯数：97戸

4 カーグワー（井泉グワー）

ナカンカー（中の井泉）ともいう石組のカーで、雑用水として使った。現在水はないが、かつてはたっぷりと水を湛えていた。

5 ハンジャタマガー（波平玉川）



ムラの発祥地近くにあるカーで、集落移動の際に福地のシーサー（獅子）と交換したという伝承が残る。ここが組踊「手水の縁」の波平玉川だという説もある。

❖ 広場 ❖

1 アガリジョー（東門）

ジューグヤー（十五夜）当日、ムラウグワンの後にこの場所で仏壇に供えるための豆腐がムラの人々に配られる。

2 シーサームイグワー

壊れたり古くなったりして役目を終えたシーサーを弔う場所。

3 ムラヤー跡

8月11日にシーサーモーラシー（獅子舞）を行う広場。

❖ 拝所 ❖

1 石原グスク



階段を上った先にある丘陵上の拝所で『由来記』の「石原城ノ嶽」といわれている。アブシバレーとジューグヤーのムラウグワンで石組の拝所を拝んでいる。

2 フカマヤー（外間家）



ムラの重要な拝所で、かつてはシーサー（獅子）をここで保管していた。正面の神棚は字伊原のムラウグワンや門中祭祀で拝み、右手は字大度の門中が拝んでいる。

3 クバオー

ブリ（岩石）に香炉が置かれた拝所で、ムラウグワンで拝む。

4 トゥン（殿）

石原村の旧家〈宇江〉の北西の祠に数個の香炉が置かれている。

5 イサラヌトゥン（石原の殿）



かつて石原グスクの丘陵南斜面に住んでいたといわれる石原一族の宗家の屋敷跡だとされている拝所。石積の祠に香炉代わりの石が数個置かれている。

6 サクマトゥン（佐久真殿）



古い時代の血縁集団のひとつである佐久真一族が住んでいたとされる場所にある拝所で、『由来記』の「佐久真殿」か「佐久真ドノ嶽」ではないかといわれている。

7 キナートゥン（喜納殿）

後に石原村に吸収されたという喜納村の拝所で、喜納一族の宗家跡だと伝わっている。現在はムラウグワンで拝んでいる。

8 ヌンドゥンチ（ヌン殿内）



石原ノロを出した家の屋敷跡で、現在は神屋のみが立つ。ムラの祭祀の中心地であり、ここの分かれだという字大度の門中など、他地域からも多くの参拝者を集める。

9 イリーヌトゥン（伊礼の殿）

伊礼集落の北にある伊礼の拝所で、ウマチーなどで拝む。コンクリート造の祠が2つに仕切られ、それぞれに香炉がある。

❖ カー ❖

1 グスクガー（城井泉）

石原グスクの南西麓にある拝泉で、アジガー（按司井泉）とも呼ばれる。『由来記』の「アシ川」ではないかとされている。

② イサラガー（石原井泉）

P6

石原のンブガー（産井泉）で、クシンカー（後井泉）、イサラムラガー（伊原村井泉）とも呼ばれる。大規模に石組されたカーで、簡易水道敷設以前は石原集落の主な飲料水源であった。

③ ミーガー（新井泉）

P14-4B

戦前掘削したカーでメーガーグワー（前井泉グワー）ともいう。

④ アガリガー（東井泉）

P6



伊礼集落の東側にある伊礼のンブガー。湧水を半円形の石組で階段状に囲っており、水量は少ないながら、現在も端正な佇まいを保っている。

⑤ ナカヌカー（中の井泉）

P6

伊礼集落の北側にある水量が豊富なカーで、飲料水として利用されていた。こちらも伊礼のンブガーだったといわれている。

1945年ごろの字伊原



凡例

- ▲サーターヤー（製糖小屋）
-クムイ（小堀、溜池）
-カー（井泉）
-その他
-公共機関
-拝所
-広場



⑥ イリーガー（西井泉）

P6



伊礼集落の西側の大规模に石組されたカーで、主に洗濯場として利用された。かつては下流に水田が造られていたという。現在は草に覆われて石組も見えない。

❖広場❖

① クムイのそばの辻

P7

盆の14日に石原の若者頭が集まり、シブイナマシ（冬瓜のなます）などを食べながら、8月の十五夜行事の棒術について話し合った場所。かつては力石も置かれていたという。

② 10番地の広場

P6



伊礼ノロを出す〈本部〉が戦後に移り住んだ所で、一角に伊礼がムラウグワンで拝む神屋が立つ。伊礼の綱引きの綱はこのガジュマルの枝を利用して作ったという。

❖その他❖

① ナビワヤー

P14-3B

石原グスク東のワイトゥイ（割取、切り通し）の坂道付近の呼び名。昔、村の人が転んでナービ（鍋）を割ってしまったことが由来だという。

② ムックイ

P14-3B

伊礼集落から南波平に抜ける道の丘陵部の呼び名で、「ムイヲクイーユン（森を越える）」というところから、こう呼ばれるようになった。

こめす 米 須

方言名：クミシ
人 口：1174人
世帯数：497戸

米須グスク南麓の緩やかな斜面に基盤目状の集落が広がり、その中央を国道331号が通る。集落南部に広々とした馬場跡が残っているのが大きな特徴で、各所に案内板や説明板も整備されていて楽しく歩ける。

❖拝所❖

① 又吉

P9



米須のクニムトゥ（国元）で、米須按司を祖先とする家筋だという旧家の神屋で〈謝名〉とも呼ぶ。ヒヌカン（火の神）のほか米須按司の名が記された位牌などが祀られた神棚があり、多くのムラウグワン（村御願）で拝んでいる。

② 〈ヌン殿内〉の神屋

P9



米須のヌルムトゥ（ノロ元）と呼ばれ、かつて米須ノロを輩出した家である〈ヌン殿内〉の神屋。ほとんどのムラウグワンでヒヌカンと神棚を拝んでいる。現在、神棚には7つの香炉があるが、かつては6つだったという。

③ 〈東リ大屋〉の神屋

P9



旧家である〈東リ大屋〉の神屋。内部正面には木製の神棚が2つあり、合計7つの香炉が置かれている。それぞれにメモ書きがあるが詳細は不明である。

④ 〈東風平〉の神屋

P8



〈東風平〉はウフムートゥ（大元）やタキムトゥ（嶽元）と呼ばれる草分け筋の家であるが、現在居住者はおらず、屋敷内の一角にコンクリートの小さな神屋が残るのみである。アブシバレーのムラウグワンで拝んでいる。

⑤ ユムチヌトゥン（世持ちの殿）

P9



『琉球国由来記（以下由来記）』の「米次ノトノ」だといわれる拝所で、シマクサラーのデイゴの下に2つ並んだの祠のうち奥のもの。ウマチャーなどでムラが拝む。

⑥ ヌルヌトゥン（ノロの殿）

P9



かつては〈仲宗根〉の東隣に祠があったが、現在はユムチヌトゥンの手前（東）に移設されている。9月9日の菊酒やシマクサラシなどのムラウグワンで拝んでおり、『由来記』の「米次ノロ火の神」ではないかと考えられている。

⑦ シチャヌトゥン（下の殿）

P9



米須グスクへの登り口の西側に広場があり、一番奥にシチャヌトゥンと呼ばれるコンクリート造の祠がある。菊酒やシマクサラシなどのムラウグワンで拝む。

⑧ クミシグシクヌタキ（米次城の嶽）

P9

米須グスクの頂上付近にあるウタキ（御嶽）で、『由来記』の「米次城ノ嶽」だといわれる。菊酒などのムラウグワンで拝むが、近年はグスク登り口の遥拝所から拝んでいる。

⑨ グスクマ（城間）

P9

シチャヌトゥン左手の遥拝所をグスクマと呼んで、ムラウグワンで北方を拝んでいる。

⑩ コバウノタキ（コバウノ嶽）

P9

米須グスク麓に残る石垣沿いにあり、『由来記』の「コバウノ嶽」だといわれている拝所。雑木林の中で正確な位置は確認できない。

⑪ 〈喜納〉の神屋

P9

旧家〈喜納〉の神屋。現在居住者はいないが、8月のアガリジョーウグワン（東門御願）では酒や線香のほか生豆腐2丁を供えて五穀豊稔や台風の被害がないことを拝む。

12 ウクマヌタキ（奥間の嶽）

P15-4F



字米須から字大度の海岸にかけて広がるオーマという砂丘があり、『由来記』の「アカウヅカサノ御イベ」にあたるウタキ（御嶽）だという。現在は祠に7つの香炉がありビジュンと呼ぶ霊石が祀られるほか、祠の後ろにも遥拝のための香炉がある。

❖カー❖

1 クミシスーガー（米須潮井泉）

P14-5E



字米須当原の海岸にある2か所の湧泉のうちの西側で、スーガーとも呼ぶ。洗濯、水浴びなどに使ったほか、正月のワカミジ（若水）や産湯の水もここで汲んだ。

湧水量が多く、干ばつでも涸れなかったが、潮の干満を見計らう必要があり、集落から遠いため運搬も重労働であった。

2 クラガー（福井泉）

P14-3D



米須グスクの丘陵北側のカーで、スーガーとともに古くから使われた水源である。1856（咸豊6）年の「詹姓家譜」には「暗川」とあり、クシンカー（後の井泉）と呼ばれることもあるが、石碑には「福井泉」と刻まれている。

3 フクラシガー（ふくらし井泉）

P14-4E



琉球石灰岩を地下約10mまで掘り下げたウリカー（降り井泉）で、水場まで緩やかな石段が続く。「詹姓家譜」の記述から1853（咸豊3）年に王府の役人によって発

見、整備されたことがわかっている。主に米須集落東部の人と大度集落の西部の人に利用された。

4 サカイガー（栄井泉）

P14-4D

1928（昭和3）年に整備されたウリカーで、集落西部の人が生活用水とした。上部の転落防止用の石は戦後設置された。

5 ユタカガー（豊井泉）

P14-3E

湧水の存在は知られていたが取水が困難で、1955（昭和30）年に簡易水道を整備するときに初めて水源として利用された。

❖広場❖

1 シマクサラー

P9

かつて厄除けのための行事シマクサラシが行われた辻。現在は行われなくなったが、牛の骨を吊るしたという樹齢100年を超えるデイゴが残り、「沖縄県の名木100選」に選ばれている。

2 アガリアシビマー（東遊び庭）・イリーアシビマー（西遊び庭）

P9

ジュグヤー（十五夜）のウシデーク（臼太鼓）は東西に分かれて行われ、それぞれにアシビマーという広場で練習する。

3 ンマンイー（馬追い）

P8・P9



米須コミュニティセンター前の幅の広い道路はンマンイーと呼ばれる馬場跡で、大正中期ごろまでンマハラサー（馬走らせ、競馬）が行われていたという。現在も綱引きやジュグヤーのウシデーク、シーサーモーラサー（獅子舞）などが行われるムラ行事の中心地である。かつては盆踊りや角力大会などもこの広場で行われた。

綱引きやジュグヤーのウシデーク、シーサーモーラサー（獅子舞）などが行われるムラ行事の中心地である。かつては盆踊りや角力大会などもこの広場で行われた。



4 サーターヤーモー（製糖屋モー）

P9

戦前、製糖工場があった所でサーターヤーモーと呼ばれていた。かつて闘牛が盛んだったころは、この広場が会場となったためウシモー（牛モー）とも呼ばれた。

❖その他❖

1 シーサーヤー（獅子屋）

P9

〈仲宗根〉の元屋敷の一角に建てられたシーシガナシー（獅子加那志）を納めた小屋。ジュグヤーに先立ち、8月9日には周辺の拝所を清掃し、シーシガナシーの化粧直しをする行事もある。

2 アジミチ（按司道）

P9

米須グスクからンマンイーまでの道をアジミチと呼んでいる。現在でも綱引きの時にクニムトゥの〈謝名〉からシタクが下りてくる道である。

3 按司のンマチナギー（馬繋ぎ）

P9



アジミチ沿いの畑にある琉球石灰岩で、穴の開いた部分に馬の綱を繫いだと伝わる。昔按司が馬に乗るときの踏み石だったともいわれている。

1945年ごろの字米須

- 凡例
- ▲サーターヤー（製糖小屋）
 -クミイ（小堀、溜池）
 -アジミチ
 -広場
 -公的機関
 -綱引きの境界線
 -拝所
 -その他



4 タバフヤー（葉タバコ乾燥小屋）

P9



昭和30年ごろ、字米須ではほとんどの農家が葉タバコを栽培しており、最盛期には共同で使った乾燥小屋が23棟あった。そのうちの1棟が現在も集落内に残っている。

5 まき橋

P14-3E



かつて宿道に架けられていた橋が現在の県道7号線の下に残っている。付近はハーグチと呼ばれる場所で1912（大正元）年ごろに大きな荷馬車が通れるように割り取り道路工事が行われたといい、この橋もその時に架けられた。

お お ど 大 度

方言名：ウドゥ
人 □：654人
世帯数：338戸

古くは小^{ウドゥ}渡と呼ばれたが、戦後に大度と改称した。集落は字域の西端、米須集落近くに位置し、その南東にさつきの城団地が広がる。小さな集落だが『琉球国由来記』には3人のノロの記述が見える。

❖拝所❖

1 〈宇栄〉



タキムトゥ（嶽元）やムラムトゥ（村元）といわれる旧家で、母屋があった場所に新たな神屋を設けてあり、ムラウグン（村御願）では最初に向かって右手の3つの香炉が置かれた神棚を拝んでいる。手前の神屋にも2つのヒヌカン（火の神）と5つの香炉があり、ムラで拝む。2つの神屋の間には獅子を保管するシーサーヤー（獅子屋）がある。

2 〈伊敷〉



伊敷門中の本家でヌルムトゥ（ノロ元）とも呼ばれ、奥間ノロを出した旧家。神屋には2つのヒヌカンと、古い位牌などが祀られた神棚がある。『琉球国由来記（以下

3 〈高嶺〉



ムラ立てに関係しているといわれる旧家で、戦前の屋敷は106番地にあったが、現在は国道沿いに移っている。神屋の神棚の香炉は、仕切りの左の5つをアジュー（按司世）といい、右の4つをカミュー（神世）と呼ぶ。神棚右手に今帰仁と玉城への遙拝所がある。

P10

4 〈伊敷〉の西側の拝所



雑木林の中に3か所の拝所がある。北の拝所は戦前小さな建物があり〈伊敷〉が管理していたというが、現在は石積が残るのみである。西には屋根付きの祠に3個の石が祀られた拝所があり、「神拝所/昭和五十五年二月十五日完成/伊敷門中」の碑が立つ。中央の広場には数個の石を積んだ拝所があり、ウマチーではここにカミンチュ（神人）が座ってミキをウサンデーしたということから、一帯はトゥン（殿）だと思われる。現在はいずれも高嶺門中が5月のウマチーで拝む。

P10

5 〈宇栄〉の後ろの拝所



〈宇栄〉の北側に、コンクリート造の祠と30cmほどの石柱を石で丸く囲んだ拝所がある。祠の中には数個の石が中央に立てられ、左右に白い香炉が置かれている。詳細は不明だが、ここで獅子を養ったという伝説が残り、年に3回、獅子舞の時にムラで拝んでいる。

P10

6 〈高嶺〉のクシ（後ろ）



戦前〈高嶺〉の北にあったことからこう呼んだ拝所で、シマクスラーともいう。獅子舞などのムラウグンで拝むほか、門中祭祀でも拝む。かつてムーチャーの日にここで牛の血を月橘^{げっけつ}の枝に付け、厄除けとして家に持ち帰った。

7 スーマ・アガリジョー（東門）



スーマは『由来記』の「シュマノロ」や「シュマ嶽」と何らかの関連があると思われるがそれに関する伝承は残っていない。

P10

8 イビ屋敷



9 オーマのビジュン



綱引きの綱などを保管する小屋の外壁の一部を凹ませて、イビと呼ぶ神石を祀ってある。8月のカーサレーにムラで拝むほか、ウマチーでも門中が拝む。

P10

2 ミーガー（新井泉）

深いところにあるウリーガー（下り井泉）で、水は良質だが運搬には労力を要した。かつてのポンプ施設の東隣の拝所を拝む。

3 ウサギガー（ウサギ井泉）

51番地の西の畑の中にあり、カーサレーにムラが拝む。

4 テーラガー（テーラ井泉）

現在国道になっているところに、戦前、若者らがモーアシビをしたというカーと広場があった。カーウガミで遙拝している。

5 フクラシガー（ふくらし井泉）

琉球王府時代、役人によって発見、整備されたカーで、地番は字米須だが字大度の人たちもよく利用した（P8参照）。

6 ウドゥスーガー（小渡潮井泉）



字米須当原の海岸の真水の湧水のうち、東側をウドゥスーガーと呼ぶ。東南にあるカンサー、タマチブなどと呼ぶ礁湖もこの近くから遙拝している。

P10

P10

P14-4E

P14-5E

7 サシキングー（佐敷井泉）

さつきの城の東側丘陵南端の石灰岩の断層から湧く水で、サッチンガーとも呼ばれ、岩場の奥に拝所がある。簡易水道の水源としても使われた。伝承では尚巴志が佐敷小按司だったころ、ここで水浴びをしたので、その名が付いたといわれている。

P15-4G

❖広場❖

1 インマウィー（馬追い）

かつてオーマの北に馬場がありンマスーブ（競馬）も行われた。戦前、綱引き前には男たちがここで酒を酌み交わしたという。

❖その他❖

1 イタジョーバカ（板門墓）

高嶺門中の分かれで、字大里へ移った小渡腹がかつて使っていた墓。墓口が分厚い板で閉じてあったのでこの名が付いた。近くには高嶺按司の墓と呼ばれるアジシー（遠祖の墓）もある。

P15-4G

2 アマンソウ

国道から糸満晴明病院に向かう道路の東にあるガマ（自然洞穴）を利用したアジシーと墓で、ガマには戦時中多くの人が避難した。宇栄・伊敷門中のムトゥーシー（現在の墓以前に使った墓）だともいう。向かって右の墓は戦後造ったものである。

P15-3F

10 高嶺門中の拝所



祠の両脇は今帰仁と玉城への遙拝所に向かいの石組はカー（井泉）である。祠は他門中も拝む。奥の祠はかつて国道の南にあった伊敷門中の拝所を移設したものである。

11 桃原カジマヤー

農地の広がる桃原にある市道米須大度南線と農道の交差点で、アブシバレーのムラウグンで、一角から東方を拝む。

P10

P15-4F

P15-4F

1945年ごろの字大度

凡例
▲サーターヤー（製糖小屋）
●クムイ（小堀、溜池）
●カー（井泉）
■公的機関
■拝所

まぶに 摩文仁

方言名：マブイ
人 □：349人
世帯数：190戸

かつては水資源が極めて乏しいことで知られた摩文仁。沖縄戦末期には日本軍の司令部が置かれたために激しい攻撃を受け、焼け野原となるが、現在は平和祈念公園も整備され、緑豊かな地域となっている。

❖拝所❖

1 大永田



クニムトゥ（国元）とされる旧家、〈大永田〉の屋敷跡で、神屋は多くのムラウグワン（村御願）で最初と最後に拝まれ、盆のナカントウカ（仲十日）やジューグヤー（十五夜）には庭でウシデーク（臼太鼓）が行われる。敷地内には永田門中の先祖の神屋と玉城への遙拝所もある。

2 ヌンドゥルチ（ノロ殿内）



摩文仁ノロに関係する拝所で、現在は赤瓦の祠にヒヌカン（火の神）が祀られているほか、2つの香炉が置かれている。ウマチーなど多くのムラウグワンで拝んでおり、〈大永田〉と同様に隣の広場でウシデークも行われる。

P12

3 トウン（殿）



ウマチーを行う拝所で、ヒヌカンなどが祀られた祠とカミンチュ（神人）が座するためのコンクリートの座席が造られている。南側には石で丸く囲まれた大小2つの拝所があり、首里の人が納めたと伝わる3つの古い香炉が残る。大きい拝所は男子禁制で、拝みの際は干支のあたる女性が中に入って供物を捧げる。

P12



1945年ごろの字摩文仁

- 凡例
- ▲サーターヤー（製糖小屋）
 -クミイ（小堀、溜池）
 -カミミチ（神道）
 -広場
 -公的機関
 -綱引きの境界線
 -拝所
 -その他



一緒に歩こう 記念碑・土木遺産

ジョン万次郎上陸之碑

P15-4G

幕末期、日米文化の橋渡し役として大きな役割を果たしたジョン万次郎が、鎖国下の日本へ帰国するための足掛かりとして上陸地に選んだのが、摩文仁間切の小渡浜（現在の大度海岸）だった。2018（平成30）年、サシチンハマ（佐敷の浜）と呼ばれる古い港口近くに造られた記念碑には、万次郎が故郷の土佐清水を力強く指差す銅像が立つ。カウボーイハットを被り、ベストやジーンズを着用しているのは上陸時の姿をイメージしたものだという。



自然公園施設の一角にある

用之助港土木學會選奨土木遺産（2009年）

P15-4F



農産物の海上輸送にも使われた

1940（明治37）年の大旱ばつで疲弊した摩文仁間切の人々を救済する目的で作られた港。約2年7か月をかけて200m余りに渡って2mの深さまで珊瑚礁を開削し、船の出入りを容易にしたもので、明治政府の救済金を原資に、間切の人々を雇って労金を与え、さらに開港後は農業だけでなく漁業でも生計が立てられるようにという石二鳥の計画に大きな期待が寄せられた。名称は当時島尻郡長として尽力した斉藤用之助にちなんで付けられた。

4 イーグスク（上城）の拝所

P15-4H



摩文仁の古島だという小高い場所にある拝所で、崖の頂上にあったイーグスクの拝所をここに移したという。3つの香炉が置かれた祠があり、ウマチーでは最後に拝む。右手の池はカミンチュが手足を洗い浄めるために造られた。

5 カーディラ

P15-4H



沖縄師範健児之塔近くの洞窟の中にある拝所でビジュンと呼ぶ霊石が祀られている。かつては元旦と9月9日に拝んでいたが、近年はほとんどの人が遥拝する。

6 カーディアの遥拝所

P15-4H



カーディアを遥拝するため、戦後イーグスクの拝所の南に祠が建てられた。子どものいる家庭が9月9日に赤饅頭などを供えて、子どもの健やかな成長を祈る。

7 カニヌタキ

摩文仁の丘全体をカニヌタキ、あるいはカジヌタキと呼ぶ。『琉球国由来記』の「玉カネノ嶽」ではないかといわれている。

8 ヌルバカ（ノロ墓）

カニヌタキの海側、ワヒチガー近くにある摩文仁ノロを葬ったという墓。現在は永田腹などが門中行事の際に遥拝している。

9 グシチャヤー

P12

かつて集落の中央部に茅葺屋根の祠があり、村落祭祀の際に拝んでいたが、現在は〈大永田〉の祠に香炉を合祀している。

10 アジシー

P12

集落北部にあるアジシーと呼ぶ拝所では、戦前、若者たちが徴兵検査の前に「検査に落ちますように」と願をかけたという。

❖カー❖

1 チンガー（金井泉）

P15-4H



摩文仁の人々の主な飲料水源、生活用水源であったカー（井泉）。沖縄師範健児之塔への降り口から海へと下る途中にある。かつて元旦にはワカミジ（若水）を汲んだ。

下流の海岸には、チンガーイノーと呼ばれる場所もある。

2 ワヒチガー（ワヒチ井泉）

P15-3J



平和祈念公園内から海への急斜面を下った崖下にあるカーで、岩間から流れ出る水を溜める水場が造られている。集落からかなり遠く、道も岩場で険しいが、干ばつなどでチンガーの水位が下がった時や洗濯などに使ったという。

❖広場❖

1 ウフナーミチ

P12

集落南の馬場があった道で、付近にはトウンやヌンドゥルチなどの拝所が集中している。かつての道幅は3、4mほどだったといい、ジューグヤー（十五夜）には綱引きも行われた。

❖その他❖

1 高摩文仁グスク

P15-4H

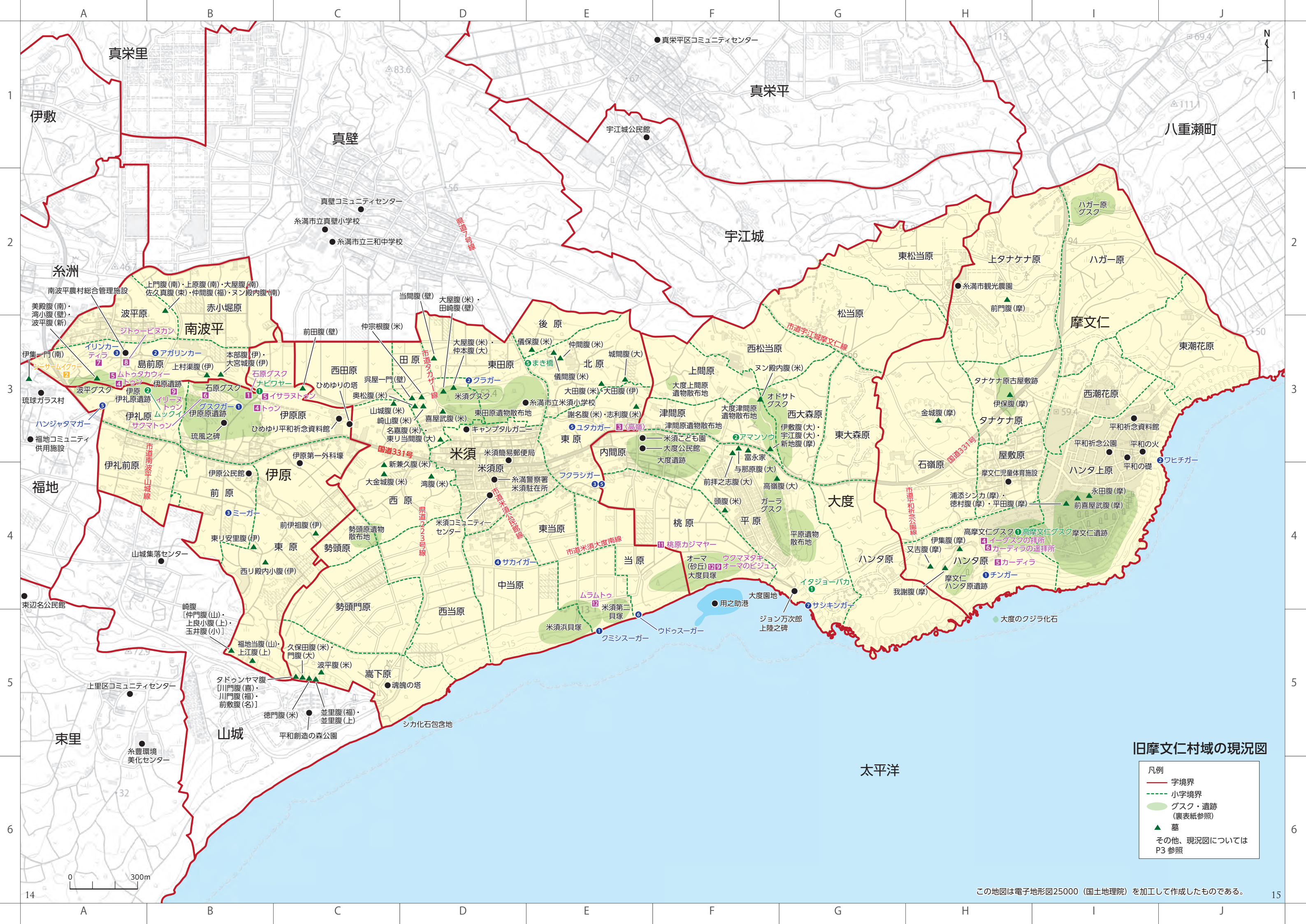


イーグスク（上城）とも呼ぶグスク跡で、本体は黎明之塔付近だったといわれる。沖縄戦と公園整備で遺構の大半が失われたが、鹿児島島の塔の後方に石垣が残る。王府

2 カミミチ

P12

戦前、ヌンドゥルチからトウンを通してムラヤー（村屋）に抜けるトウンミチ（殿道）という細い道をカミミチとも呼んだ。現在のウマチーでもウンサク（神酒）を担いでこの道を通る。



旧摩文仁村域の現況図

凡例

- 字境界
- 小字境界
- グスク・遺跡
(裏表紙参照)
- 墓
- その他、現況図については
P3 参照

日本最南端の縄文遺跡

— 摩文仁ハンタ原遺跡 —

旧摩文仁村域には、日本最南端の縄文時代の遺跡があります。摩文仁ハンタ原遺跡がそれで、沖縄島南東端の海岸近くの標高約30mの琉球石灰岩崖下の岩陰部分とその周辺の平地からなる縄文時代後期（約4,000年前）の埋葬遺跡、つまり縄文時代のお墓の跡です。2007（平成19）年から2010（平成22）年までの4年にわたって、糸満市教育委員会と土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム（山口県下関市）による共同の発掘調査が行われ、多数の人骨や人工遺物が出土しました。

発掘調査面積は約5㎡と小範囲でしたが、約85体分の縄文人骨が発掘され、人工遺物は土器、石器、貝製品、骨製品及び石材など270点余が出土しました。

縄文人骨は、頭から足先まで全体が揃っているのではなく、体の部分ごとに集めて葬られていました。頭骨は岩陰奥側に、大腿骨などの長骨は岩陰手前側から集中して見つかりました。約85体分のうち性別のわかる下顎骨は、男性32体、女性31体の計63体で、ほかに性別不明の幼児6体、乳児9体、不明（小破片のため）7体となっています。男性の平均推定身長は159cm前後ですが、なかには169cm前後の長身の人もいたようです。

貝製品などの人工遺物は、埋葬状態の人骨と混ざって出土しました。この遺跡の大きな特徴は、様々な種類の貝製品が出土していることです。人工遺物の80％は貝製品で、種類は貝輪、線刻有孔製品、シャコガイ製有孔異形板状製品、白玉、タカラガイ製品、貝珠、札状製品、巻貝製品、巻貝有孔製品、二枚貝有孔製品、有孔貝製品、ヤコウガイ製品などで新発見の貝製品もあります。特徴的な貝製品の1つは、イモガイの貝殻に細い直線を刻み、孔を4つあけた線刻有孔製品（写真①）で、もう1つは、シャコガイの蝶番近くを切り取り、孔を2つあけ、周囲を段状に整形したシャコガイ製有孔異形板状製品（写真②）です。これら貝製品の多くは、縄文人が身に着けた装飾品と考えられますが、もしかすると葬られた人々が生前使っていたものか、あるいは残された人々が、永遠の別れの意味を込めて一緒に埋葬したものかもしれません。いずれにしても、私たちの目からみても繊細な製品です。

このような貝製品を残した摩文仁ハンタ原遺跡の縄文人はどのような家に住み、どのような生活を営んでいたのでしょうか。残念ながら当時の調査では、住居跡を見つけることはできず、具体的な生活内容を知ることはできませんでした。しかし、埋葬人骨の多さから長期間にわたって遺跡周辺に住み続けたこと、頭部と大腿骨を別々に葬るなど何らかの宗教的意味合いがみられること、繊細な貝製品と一緒に埋葬したことなどを考えると厳しくも豊かな自然環境を生き抜く中で、縄文人が複雑な精神活動を行い、社会活動もまた多様であったことがわかります。



摩文仁ハンタ原遺跡遠景

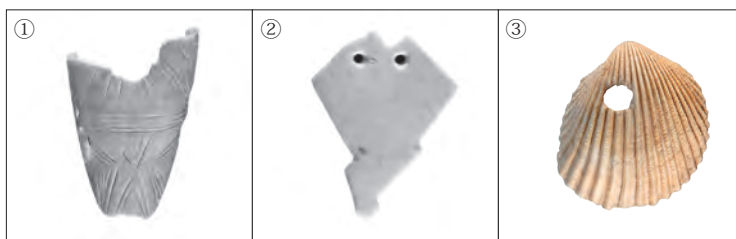


縄文人骨の発掘状況

旧摩文仁村域のグスク・遺跡など

No.	字名	名 称	主な時代
1	南波平	波平グスク P14-3A	グスク時代
2	伊原	伊原遺跡 P14-3B	グスク時代
3		石原グスク P14-3B	グスク時代
4		伊原伊礼原遺跡 P14-3A	グスク時代
5		伊原原遺跡 P14-3B	グスク時代
6	米須	米須グスク P14-3D	グスク時代
7		シカ化石包含地 P14-5D	—
8		勢頭原遺物散布地 P14-4C	近世
9		米須浜貝塚 P14-5E	弥生～平安並行時代
10		東田原遺物散布地 P14-3D	グスク時代～近世
11		米須第二貝塚 P14-4E	弥生～平安並行時代、グスク時代
12	大度	大度遺跡 P15-3F	グスク時代～近世
13		津間原遺物散布地 P15-3F	縄文時代
14		ガーラグスク P15-4F	グスク時代
15		オドサトグスク P15-3F	グスク時代
16		大度のクジラ化石 P15-5H	—
17		大度貝塚 P15-4F	弥生～平安並行時代
18		大度上間原遺物散布地 P15-3F	グスク時代～近世
19		大度津間原遺物散布地 P15-3F	近世
20		平原遺物散布地 P15-4G	グスク時代～近世
21		高摩文仁グスク P15-4H	グスク時代
22	摩文仁	ハガー原グスク P15-2I	グスク時代
23		摩文仁遺跡 P15-4I	グスク時代
24		タナケナ原古屋敷跡 P15-3H	近世
25		摩文仁ハンタ原遺跡 P15-4H	縄文時代

※遺跡の年代については現時点でのものであり、将来の調査の進展に伴い変更される可能性がある。



① ほぼ全形がうかがえる線刻有孔製品

② 全面に研磨が施された有孔異形板状製品

③ この有孔貝製品にも細擦れ痕がみられた

糸満市の歴史と民俗を歩く「屋号地図」は糸満市ホームページからダウンロードできます。

糸満市 屋号地図

検索

旧兼城村編・旧高嶺村編・
旧糸満町編・旧真壁村編・
旧喜屋武村編もこちらから！



糸満市の歴史と民俗を歩く 旧摩文仁村集落ガイドマップ

発行日：令和4年3月25日

発行：糸満市教育委員会

編集：糸満市教育委員会総務部生涯学習課

〒901-0392 沖縄県糸満市潮崎町1丁目1番地 TEL 098-840-8163

令和3年度 沖縄振興特別推進市町村交付金
生活感幸（観光）環境づくり事業